慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第92回北里記念式開催

【受賞者講演】

北里賞
内科学（循環器）教室　専任講師　**遠山　周吾**（85回）
「多能性幹細胞における代謝機構に基づく細胞作製と臨床応用」

北島賞
整形外科学教室　准教授　**渡邉　航太**（76回）
「脊柱側弯症の病態解明と新たな診療ツールの開発」

受賞者との記念撮影　撮影：竹松　明季

小林弘祐　北里研究所理事長によるご挨拶

6月12日に、信濃町キャンパス北里講堂において第92回北里記念式が行われました。医学部ならびに三四会（医学部同窓会）では、初代医学部長・病院長である北里柴三郎博士の6月13日のご命日に際し、その偉業を長く記念すべく、北里記念式を行っています。2020年より新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け中止としておりましたが、今回、4年ぶりの開催となりました。

北里柴三郎博士は明治25年に福澤先生の援助により芝公園に伝染病研究所を創設しました。福澤先生の志に報いるため、初代医学部長として就任し、現在の医学部および大学病院の礎を築きました。

記念式では、伊藤公平塾長（欠席のため北川雄光常任理事が代読）、金井隆典医学部長、武田純三三四会長、小林弘祐北里研究所理事長の挨拶に続き、三四会賞（北里賞・北島賞）の授賞式が行われました。学校法人北里研究所からは、小林弘祐理事長、島袋香子北里大学学長はじめ多くの来賓のご臨席を賜りました。

三四会による北里賞は、北里柴三郎博士の偉業を記念して、昭和26年に始まりました。昭和33年からは第二代医学部長北島多一博士を記念した北島賞も加わりました。

北里賞（基礎研究、および臨床への発展研究における優れた業績に対して授与される）、北島賞（臨床医学、および臨床研究における優れた業績に対して授与される）は、医学部における権威ある学術賞であり、国際的にも評価される業績が選ばれています。

今年度の北里賞、北島賞の授賞式後には、受賞者による講演が行われました。参加者は、最先端の医学研究成果の発表に熱心に耳を傾けていました。

北里賞
北里賞を受賞して

循環器内科　**遠山　周吾**（85回）

この度は北里賞を賜り、大変光栄に存じます。本賞の選考に関われた先生方に心より感謝申し上げます。

私が再生医療研究を行うに至った経緯や研究内容に関して簡単にご紹介させていただきます。私は、医学部2年時（2001年）に父が心筋梗塞を発症したことを契機に、心臓のことを深く学びたいと思うようになり、自主学習プログラムにおいて当時心臓先進治療学講座の講師をされていた福田恵一先生にお世話になり、体性幹細胞やES細胞について学ぶ機会をいただきました。また、医学部6年時（2006年）に、当時循環器内科の教授をされていた小川聡先生のご紹介で、香坂俊先生が当時勤務されていたTexas Heart Instituteの心臓移植病棟を見学させていただく機会をいただき、心臓移植治療における米国と日本の違いを痛感すると同時に、ドナー心臓に依存しない治療法の必要性を強く感じました。その後、東京都済生会中央病院において初期臨床研修を行っていた2007年に、京都大山中教授らによりヒトiPS細胞が誕生したことを知り、ヒトiPS細胞を用いた心臓再生医療の臨床応用に貢献する研究を行うことを目標に大学院に入学しました。

実際に研究を始めてみますと、多くのハードルに直面しました。まず、分化後に心筋以外の細胞が混入することによる〝腫瘍化〟の問題です。この課題に対して、細胞種ごとの代謝機構の違いに着目した『培養液を利用した心筋選別法』を世界で初めて確立し、克服することに成功しました（Cell Stem Cell 2013, Cell Metabolism 2016）。この方法は、遺伝子改変することなく安価かつ簡便に心筋細胞を作製できるため、現在では世界の標準的細胞作製法となっています。また、腫瘍化の原因細胞である未分化幹細胞において、脂肪酸合成経路が活性化していることに着目し、『脂肪酸合成酵素阻害による未分化幹細胞の選択的除去法』を開発しました（iScience 2020, STAR Protoc 2022a）。

もう1つのハードルが〝量産化〟です。つまり、患者一人に必要とされる数億個の心筋細胞を一度に作製する方法が確立できていませんでした。そこで、試行錯誤の末に『多層培養プレートを用いた大量培養法』を構築しました（Stem Cell Reports 2017, Scientific Reports 2019）。これにより、一度に10億個程度の心筋細胞の作製が可能となりました。さらに、大量の心筋細胞を作製するにはヒトiPS細胞も大量に増やす必要がありますが、動物成分を含まない臨床用の培養液ではヒトiPS細胞の増殖が悪かったため、培養液の成分を一から見直しました。その結果、ヒトiPS細胞の増殖の際にはトリプトファン代謝が重要であることを見出し、『トリプトファン強化培養液によるヒトiPS細胞の増殖促進法』を開発しました（iScience 2021, STAR Protoc 2022b）。

細胞移植の安全性有効性に関しても、マウスやラット、ブタ、サルを用いて繰り返し検証してきました（J Heart Lung Transplant 2019, J Am Coll Cardiol_BTS 2021）。これらの成果により、昨年12月より企業治験として虚血性心筋症に対するヒトiPS細胞由来心筋組織球移植を開始するに至っております。

その他、最近では、ブタ心臓由来コラーゲンを用いることで、試験管の中でヒト成熟心筋組織を作製し（Biomaterials 2023）、疾患モデルや創薬研究への応用にも取り組んでおり、再生医療と共に今後発展させていきたいと思っております。

末筆ながら、ご推薦いただいた山岸敬幸教授はじめ共同研究をさせていただいている先生方、サポートいただいている企業の皆様、研究チームの皆様、長年ご指導いただいた福田恵一前教授にこの場を借りまして心より感謝申し上げます。

北島賞
北島賞を受賞して

整形外科学教室　准教授　**渡辺　航太**（76回）

この度は慶應医学最高の栄誉である北島賞を受賞することが出来ました。これまで私の診療や研究に関わっていただいた皆様に、心より感謝申し上げたいと思います。

私の研究テーマである脊柱側弯症とは背骨が捻じれるように変形する疾患で、乳幼児から高齢者までの全ての年代で発症し、重症例では心肺機能障害、腰背部痛、身体機能低下など深刻な問題を惹起します。しかしその発症や進行の原因は明らかではなく、治療体系も十分に確立されているとはいえません。

私は2004年より当科の松本教授のご指導の下、この脊柱側弯症の診療、臨床研究、そして基礎研究に従事してきました。当初は当院の側弯症手術は17例でしたが、その後手術件数は年々増加し、現在では国内最多レベルの症例数（約250例）にまで増加しています。さらに2021年からは側弯症診療センターを立ち上げ、小児科、麻酔科、小児外科、リハビリテーション科、放射線科、遺伝センターの多くの先生方と協力して、安全で最先端の治療を行っております。

基礎研究では、側弯症の遺伝子研究を理化学研究所の池川志郎先生と共同で行いました。今までに20個の疾患感受性遺伝子座の同定に成功し、世界で初めてpolygenic risk scoreという手法を用いて遺伝子情報から側弯症の発症と進行を予測するモデルを報告しました。さらに、発症に関与する環境因子を同定するために、東京都予防医学協会や東邦大学公衆衛生学教室の西脇祐司先生の協力を得て、中学女子を対象に生活習慣と食習慣に関する網羅的な調査を行い、発症に関与する複数の危険因子の同定に成功しました。近年では、側弯症の早期発見と早期治療を目指して、慶應義塾大学理工学部の青木義満教授と元理工学部教授の佐藤幸男先生と共同で、人工知能を用いた側弯症検診機器の開発にも取り組んでいます。

これまでに数えきれないほど多くの方々に支えられながら、研究活動を行ってきました。まだまだ道半ばではありますが、この栄誉ある北島賞の受賞を機に、心から感謝の意を表したいと思います。

鑑賞知来

私は2014年から約3年間、パーキンソン病の診療・研究で有名なインスブルック医科大学に留学し、様々な経験を積む機会を得ました。特にパーキンソン病ナースと呼ばれる専門看護師さんを中心としたチーム医療に感銘を受け、帰国後は慶應病院でパーキンソン病に対する多職種連携チーム医療を実現するために尽力してまいりました。昨年、パーキンソン病センターを開設させていただいた後も、最適な多職種連携チーム医療について探究する毎日です。

多職種連携チームの英訳としてよく用いられるmulti-disciplinary teamは各専門職が個別の目標と役割を設定して各々患者さんを診る形で、専門職間の繋がりは希薄なチームです。一方、inter-disciplinary teamは専門職間の連携が密になされるチームで、患者さん・ご家族を多職種の繋がりの輪で囲んだ図はよく目にします。患者さんを多職種で支える形と共に、近年は患者さんもメンバーとして多職種の輪に加わる参加型医療（patient-as-partner approach）も重要視されています。阿部能成先生はチーム医療の種類をスポーツ（リレー、テニス、ヨット、サッカー）に例えています。ここで全ての説明はできませんが、サッカー型は共通の目標に向かって情報をやり取りしつつ、直接そこに関与しないメンバーも他の動きに合わせて行動していくスタイルであり、パーキンソン病診療において望ましい形と考えています。

多職種連携チーム医療の理想的な形、医師に求められる役割は状況、疾患により異なり、1つの正解が存在するわけではありません。最新の医学教育モデル・コア・カリキュラムでは、医師として求められる基本的な資質・能力の1つとして「多職種連携能力」が挙げられており、まさに生涯にわたり研鑽していくことが求められる能力と言えるかもしれません。

（神経内科　關　守信　82回）

春の叙勲

藍綬褒章
木下　勝之（産婦45回）
〈保健衛生功績〉
（公社）日本産婦人科医会名誉会長
（医）九折会成城木下病院理事長

旭日双光章
小林　米幸（外53回）
〈保健衛生功労〉
元（公社）大和市医師会会長
（医）小林国際クリニック理事長・院長

瑞宝中綬章
青木　　誠（内49回）
〈保健衛生功労〉
元（独）国立病院機構東埼玉病院長

瑞宝中綬章
市来嵜　潔（外48回）
〈保健衛生功労〉
元（独）国立病院機構神奈川病院長

瑞宝小綬章
根本　孝一（整55回）
〈防衛教育功労〉
元防衛医科大学校副校長

瑞宝小綬章
髙宮　眞樹（精57回）
〈保健衛生功労〉
髙宮病院長

藍綬褒章を受章して

木下　勝之（産婦45回）

この度は、2023年度春の褒章に際し、はからずも藍綬褒章を受章することになりました。早速に、慶應義塾長伊藤公平先生並びに慶應義塾医学部三四会会長武田純三先生、また多くの皆様より、ご懇篤なるご祝意を賜りましたこと、大変恐縮に存じます。誠に有難く厚く御礼申し上げます。

藍綬褒章は、教育、医療、社会福祉、産業振興などの分野で公衆の利益を興した人に与えられるものとあります。

振り返りますと、平成17年、私は順天堂大学医学部産婦人科主任教授の身でしたが、当時の公益社団法人日本産婦人科医会会長より副会長に推薦され、医会に初めて参加することになりました。その翌年から公益社団法人日本医師会常任理事を4年間併任した後、平成24年医会会長に選任され、会長として10年間務めた後、令和4年82歳の高齢を理由に退任するまで、延べ17年間の医会活動と4年間の日本医師会活動を通して、日本の産婦人科医療の抱える様々な問題解決と発展に尽力してまいりました。

私は、慶應義塾大学医学部を昭和41年に卒業後、インターン研修を慶應病院で済ませたのですが、慶應病院には残らず、東京大学医学部産婦人科学教室へ入局することにしたのです。それ以来、東京大学医学部産婦人科学教室員として17年の間に、スウェーデン・カロリンスカ研究所に2年間留学。帰国して最後の4年間は産婦人科講師を務めた後、昭和60年、新設の埼玉医大総合医療センター産婦人科学教室に助教授として赴任しました。それから4年後には、教授となり退任するまでの12年の間に、日本で最大規模の総合周産期母子医療センターを埼玉医大総合医療センターに併設するなどして、埼玉県の母体救急救命と大規模なNICUを完備した施設として機能させ、平成13年には順天堂大学医学部産婦人科学教室主任教授に選任されました。

このような経歴に、前述の日本産婦人科医会と日本医師会での活動の時期が続きます。

思い出しますと、昭和41年慶應義塾大学医学部卒業式で永沢邦男塾長が述べられた、「福沢諭吉先生の「独立自尊」の精神を受け継いで人生を送るように」との訓示のお言葉は、私の心にしっかり刻まれていました。経歴は異質でしたが、三四会会員であることを誇りにおもい、ここに改めて、皆様のご厚誼とご指導のお蔭で今日の私があるものと、心より感謝申し上げます。

旭日双光章を受章して

小林　米幸（外53回）

このたび、令和5年度春の叙勲において旭日双光章を受章させていただきました。これは大和市医師会副会長を3期6年、同会長を5期10年、同時に神奈川県下16都市医師会で構成する神奈川県医師会の最大会派である相模医師会連合会の副会長を3期6年、同会長を1期2年務めたことによりいただいたものと理解しております。

受章と私が取り組んできた医療とは何の関係もありませんが、あえてお話しさせていただきます。私は外科学教室から派遣された大和市立病院に勤務しているときに、故国の共産革命に国を追われたカンボジア人、ラオス人が入所するインドシナ難民大和定住促進センターの嘱託医を兼任いたしました。日本語が理解できない人たちにとって適切な医療を受けることの困難さを痛感、平成元年末で大和市立病院の職を辞し、同市内に日本人も外国人も同じ地域住民として受け入れる小林国際クリニックを開設いたしました。現在では院内で英語、スペイン語、韓国語、タイ語、フィリピン語、ベトナム語に対応しており、患者の約30%近くが外国人で、月間の延べ外国人患者数はおよそ300人程度です。

私は当初、さまざまな問題を抱える外国人を人道上、気の毒と思い、医療を行ってきました。しかし、我が国は79年に国際人権規約を批准、81年には難民の地位に関する条約に加盟しており、その第四章には「福祉については内外平等原則」が謳われていることを知りました。具体的には適切なる在留許可を持って3か月以上の中長期に我が国に居住する外国人の医療を含む福祉については、日本人同様に扱わなくてはいけないという意味です。外国人にも公的保険をはじめ、我が国の医療制度が適用されるのはこうした背景のためです。

今年で卒後49年、73歳となりました。人生という航路の終点もそう遠くはないと思いますが、淡々と現在の医療を続けていけたらと考えております。

瑞宝中綬章を受章して

市来嵜　潔（外48回）

令和5年春の叙勲に際し、はからずも瑞宝中綬章受章の栄に浴し、さる5月12日皇居豊明殿において天皇陛下の拝謁を賜るという貴重な経験をさせて頂きました。これもひとえに皆様のご支援があってのことと深く感謝申し上げます。

私の国立病院勤務は、国立東京第二病院（昭和56年～平成17年現東京医療センター）と国立病院機構神奈川病院（平成17年～平成22年）の2か所で合計29年間でした。振り返ると規模も環境も全く違う二つの病院ですが、勤め始めて受けた印象は、活気のない受付、救急を受けない体質、杜撰な診療録管理と、不思議なくらい似ていました。手術症例を増やしたかった私は、救急ことに救命救急センターを活用したかったのですが、実情は院内ICUで、「人工呼吸器2台使用」→「救急は断る」という運用が常態化していました。

転機は、昭和60年の暮れに東邦大学病院近くで発生した「勇気ある大学生事件」で、「たらい回しの結果死亡」と連日マスコミが取り上げたことから、東京都の3次救急体制が一変しました。東京消防庁と各救命救急センターの間にホットラインが敷かれ、空床があるかぎり救急患者が搬送されることに。救急搬送の件数が急増し、救急体制の再構築を迫られ、研修医の救急研修システムを変えることで対処。結果として病床利用率の改善につながりました。研修施設として重要な診療録管理は中央管理がなされておらず、診療科によってバラバラな運用でした。様々な検討の結果、改善策は電子カルテ化しかないとなったのですが、予算の捻出が出来ない。様々な方のアドバイスを得て、医事会計システムにオーダリングを追加するなど、少しずつ電子化を進め平成18年にやっと電子カルテにたどり着きました。この経験を生かして神奈川病院の再建の道筋をつけることができたことが、今回の貴重な経験につながったのかと思います。

最後になりますが、様々な局面でお力添えをいただいた三四会員の先生方に心から感謝申し上げます。

瑞宝小綬章を受章して

根本　孝一（整55回）

この度、令和5年春の叙勲において、図らずも瑞宝小綬章を拝受しました。

間宮群二教授、矢部裕教授、戸山芳昭教授をはじめ、これまでにお世話になった多くの先生方に深く感謝申し上げます。

私は昭和51年に慶應医学部を卒業し、直ちに母校の整形外科学教室に入局しました。泉田重雄教授・池田亀夫教授の指導の下で一般整形外科を学んだ後、内西兼一郎助教授・伊藤恵康講師の下で手外科・末梢神経外科を修練しました。数か所の関連病院で臨床研修を受けた後、国立栃木病院（三笠元彦医長）に約10年間勤務しました。その間、2年間カナダMcGill大学形成再建外科（H. Bruce Williams教授）に留学する機会を得ました。日本とは異なる文化圏で生活し、異なる医学教育・医療制度の中で勉強した経験はその後の人生に有益でした。

平成4年、防衛医大に整形外科講師として着任しました。新名正由教授の下で手外科班の責任者を命じられ、以後、主として手外科・末梢神経外科の教育・研究・臨床に従事しました。ついで、冨士川恭輔教授の下で助教授を命じられ講座の運営にも参画しました。半年間、英国に公務出張しました。

平成16年に整形外科学教授を拝命し、自衛隊衛生で求められる整形外科医の能力と役割を考えつつ、講座の運営と教育にあたりました。整形外科を専攻した研修医全員が整形外科専門医の資格を取りました。教授在任中に訴訟案件は1件もありませんでした。

瑞宝小綬章を受章して

髙宮　眞樹（精57回）

この度、図らずも瑞宝小綬章の栄誉に浴したところ、三四会会長　武田純三様をはじめ塾長　伊藤公平様、常務理事　北川雄光様、医学部長　金井隆典様、病院長　松本守雄様からご祝意を賜り、厚く御礼を申し上げます。私は昭和53年に塾医学部を卒業し、精神神経科学教室に入局しました。慶應病院、東京武蔵野病院で研修医・専修医過程を終了し、昭和60年に塾医学研究科の学位を戴いた後に宮崎県の高宮病院に勤務して38年間、地域精神科医療に従事してまいりました。その間、平成19年より県精神科病院協会長を11年間勤め、その後も県精神保健福祉連絡協議会長を務めており、平成30年に宮崎大学や県医師会をはじめとした医療関連17団体及び県内企業50社の御支援の元、宮崎いのちの電話を創設しました。

慶應高校から医学部に進学し、2年生秋に全塾のアメラグ同好会を退部した後は医学部スケート部で現在まで保持できた体力と気力を養いました。卒業後は精神神経科学教室で故保崎秀夫元教授、故伊藤斉元助教授、故吉田弘宗指導医をはじめとした多くの先輩方に精神科医としての基本を教えて戴き、宮崎に帰郷後も綾部隆夫元宮崎市郡医師会長をはじめとした宮崎三四会の方々に御指導を戴きました。そして、平成23年秋に宮崎で主催しました第9回日本精神科救急学会では、特別講演の西山正徳君（56回）、シンポジウム司会の藤井康男君（56回）、シンポジストの佐久間啓君（61回）、渡邊衛一郎君（67回）に学会を盛り上げて戴きました。更に平成26年、医療法改正による医療事故調査制度創設に際しての厚労省検討会に日本精神科病院協会医療安全担当常務理事として構成員となり、大変な苦労を重ねましたが、担当の厚労大臣政務官が塾員の橋本岳君（平成8年環境情報学部卒）であったことから仕事を全うできました。その他にも多くの先輩・後輩、なにより56回、57回や慶應高校22期の友人に助けてもらってきました。

福沢先生の「慶應義塾の目的は気品の泉源、知徳の模範である」を肝に銘じて、これからも地域精神科医療に貢献したいと考えております。